

時間的展望の関連要因に関する研究の動向

Review of the factors related to Time Perspective.

杉 山 成

個人の目標や希望が位置する「心理学的未来 (psychological future)」は、現在の行動を制御し、組織化するような力動的な役割を果たすと考えられる (都筑, 1982)。

こうした個人の心理学的未来や心理学的過去に対する研究領域に関心が向けられたのは、それらを「時間的展望 (time perspective)」として概念化した Frank (1939), そしてその概念を場の理論 (field theory) に組み入れていった Lewin (1942; 1951) 以降であるとされる。Frank (1939) は、文化的に決定された時間性 (temporarility) に対する態度、および過去や未来の間の相互作用が人間の行動に影響を与えると主張し、Lewin (1942) は、その概念を自身の提唱する場の理論に導入した。そして、人間の行動は、現在の生活空間 (life space) によるが、その生活空間には、未来と過去への広がりである時間的展望があると主張し、そして、個人の粘り強さ、集団のモラル、およびリーダーシップなどが時間的展望のあり方に強く依存していることを指摘した。

その後、時間的展望の構造や意味を明らかにしようとする多くの実証的な研究が行われるようになり、後述するように、さまざまな時間的展望の概念が提出され、検討されてきた。その結果、こうした時間的展望の各変数と現在の感情・行動との関連性についての実証的な証左が数多く示された。その領域は、きわめて幅広い領域にわたるが、特に精神病理をはじめ、非行、抑うつ傾向、不安、自殺企図などの現在の不適応状態・不適応行動と未来展望の関連性に関する研究が多く報告されて

おり、それゆえ、個人の未来展望について、その形成の規定要因や行動との関わりについて検討することは、不適応への心理的援助を考える意味でも、多くの価値を持つと考えられる。

本稿では、まずこれまでの時間的展望に関する心理学的研究のうち、その関連要因に関するものを概観し、その上でこれらの先行研究における問題点および今後の課題について検討する。

時間的展望概念

Lewin による時間的展望の概念化・理論化の後、1950年代になって、時間的展望の実証研究が多く行われるようになった。その際、その多くは Lewin の理論化に基づいたものであったが、Lewin の定義が、広義かつ曖昧なものであったため、個々の研究者は、時間的展望の関連要因や構造を検討していく際に、実際には様々な下位概念を独自に定義し、また独自の測定手法を使用していた。例えば、都筑 (1982) によれば、時間的展望の下位概念として提出されたものには、以下のものがある。(1) 長さ (extension) — 概念化された将来の時間的範囲の長さ。(2) 密度 (density) — 個人が未来に想像する出来事や経験の数。(3) 一貫性 (coherence) — 概念化された未来の中における組織化の程度。(4) 方向 (direction) — 過去、現在、未来の3つの時間的領域の中で、どの領域に対する志向性が強いかということ。(5) 時間関連性 (time relatedness) — 過去、現在、未来がどの程度関連を持ってとらえられ、かつ統合されているかということ。(6) 方向性 (directionality) — 現

在の瞬間から未来へと移行する感覚。(7) 個人的な時間的展望 (personal time perspective) — 現在と過去, 現在と未来との主観的評価の差。(8) 時間的態度 (time attitude) — 過去, 現在, 未来に対する感情的態度。(9) 情緒的意味 (affective meaning) — 未来におこる出来事の主観的意味を評価 (evaluation) と潜在力 (potency) の積によってとらえるもの。

このように, この時期の時間的展望の実証的研究においては, 様々の概念が十分な定義を成されないまま, また研究者間の共通理解が成されないまま用いられてきた。この点に関して, Wallace & Rabin (1960) は, 時間的展望の概念規定が曖昧であると概観し, 一貫した理論的・方法論的な観点からなされる研究の必要性を指摘した。

時間的展望概念の分類 そうした批判を受け, 近年, Nuttin & Lens (1985) や Hulbert & Lens (1988) は, 時間的展望の多様な各概念を次の3つの大きな分野, すなわち, 広義の時間的展望 (Lewin の定義に対応する) を狭義の時間的展望, 時間的態度, 時間的志向性に分類している。(狭義の) 時間的展望 (time perspective) とは, 上述の extension, density, 構成の程度などを含む, 時間的展望における構造的な側面である。時間的態度 (time attitude) とは, 個人の過去・現在・未来に対するポジティブないしネガティブな態度, 時間的志向性 (time orientation) は, 個人の思考, 行動の優先的な方向性とされる。

この概念整理の最大の特徴は, 時間的志向性の定義にある。従来, この用語は, 他の側面と混同されて用いられてきた。例えば, 未来展望の長さで混同された「未来展望の長いことが未来志向的である」という解釈や, 未来に対する態度と混同された「未来に対する態度がポジティブなことが未来志向的である」という解釈, さらに「未来志向性でない個人は現在志向的である」という現在志向性と未来志向性を二者択一的にとらえる解釈などである。時間的展望と時間的志向性が独立の次元であり, 区別されるべきことがこれまでも繰り返

し指摘されてきたにもかかわらず, その後の研究においても, 両者は必ずしも区別されてこなかったのである (白井, 1994)。

Nuttin & Lens (1985) の概念整理は, こうした議論の混乱を克服するために成されたものであり, 時間的志向性を (狭義の) 時間的展望や時間的態度から明確に分離することを目指している。こうした概念整理は, 現時点で必ずしも十分な合意が得られているわけではないが, 研究の生産性を高めるためには, こうした共通理解を作成しておくことは極めて重要であろうと考えられる。本稿においては特に説明の無い限り, この Nuttin & Lens (1985) による概念枠組みに従うこととする。

時間的展望の先行要因

まず, 本節では, 主に社会経済要因やパーソナリティ変数といった時間的展望の先行要因としてとらえられるものを検討する。

(1) 社会経済要因

個人がどの社会階層に所属するかという要因によって時間的展望の長さが異なるということについては, 比較的早期から研究が進められており, 好ましくない文化や社会・経済的条件にいる個人の未来展望が, 非常に制限されたものになっていることが示されている。

まず, Le Shan (1952) は, 8歳から10歳の児童117名を用いて, 物語構成法を用いた検討を行っている。それによれば, 下層階級の児童は中産階級の児童に比して, 物語に示された未来展望の長さが短い。Lessing (1968) は, 5・8・11年生で Le Shan (1952) の追試を行い, 同様の結果を見いだしている。また, Kendall & Silbey (1970) は, 11~13歳を対象にして, 時間的範囲 (span) に関して, 同じように Le Shan (1952) の結果を支持している。ただし, 物語に含まれた動詞を時制によって分類するという分析手法においては, むしろ中産階級の児童は, 下層階級の児童よりも未来動詞が少なく, 過去動詞の使用頻度が多かつ

た。この動詞の分析に関しては、使用し得る語彙の数という問題が関わっているものと推測される。

時間の長さ以外の側面に関して、Lamm, Schmidt, & Trommsdorff (1976) は、彼らの定義による未来志向性 (future orientation) として、複数の次元 (extension, density, optimism など) を検討している。その結果によると、中産階級の青年は、下層階級の青年よりも、未来志向性において長く志向づけられており、それは、公的な関心と同時に私的な関心と関連する希望や恐怖に結びついている。そして、時間的展望の短さは、下層階級にあるが故の限定されたプランニング行動に原因を求めることができると指摘している。

個人の時間的展望が社会化の過程の結果であるという結論は、多くの研究を示すところであり、個人はそれぞれの所属する社会・文化の「社会的時計 (social clock)」を内面化していくものと考えられる。Nuttin & Lens (1985) は、そうした時間的展望の社会化の観点から、下層階級の青年にとっては未来に対するプランや行動的プロジェクトを持たないことが「現実的」であるためである、という見解を提示している。その例として、オーストラリアのアボリジニ (先住民族) の子供においては、大きく、しかし遅延される満足よりも、即時的な、しかし小さい満足を好んだ子供の知能指数は、同年齢の仲間よりも有意に高いという Bochner & Davids (1968) の結果を示し、この文化の中では知能の高い子供は、信用、信頼できないものとしての未来を学んでいるのであると説明している。

(2) パーソナリティ

各種のパーソナリティ変数と時間的展望との関連を検討した研究に、Lessing (1968) や Robertson (1978) がある。まず、Lessing (1968) は、5, 8, 11年生746名に対して、未来展望の長さを出来事検査と物語完成法という2つの手法によって測定し、パーソナリティ変数は、CTI (California Test of personality), 満足遅延尺度 (Buterbaugh, 1962), 個人的責任性尺度 (Stodtbeck, 1958) を用

いた。その結果、物語完成法で測定される未来展望の長さは健康的なパーソナリティと関連を持っていることが確認された。

また、Robertson (1978) は、大学生、大学院生を対象に、物語完成法による未来展望の長さ、および SD 法による時間的態度 (彼らの表記では時間的評価 temporal evaluation であり、過去・現在・未来に対する評定を合計した得点を指している) という時間的展望の変数と以下の諸変数の関連を検討した。(1) PIL (Crumbaugh, 1968), (2) 16PF によって測定される自我強度, (3) SD 法による自己評価, (4) I-E スケールにおける Locus of Control の外的統制傾向 (Rotter, 1966), (5) 堅さ (Zelen & Lewitt, 1954), (6) 独断主義 (Rokeach, 1960), (7) 顕在不安と学業達成に関する2つ (促進不安, 抑制不安) の不安の程度 (Alpet & Haber, 1960)。そのうち、(1) から (3) までの変数に関しては、時間的展望とポジティブな関連、(4) から (7) までの変数に関してはネガティブな関連を示すことが推測された。結果として、未来展望の長さ、時間的態度共に各変数との予想通りの方向での相関係数が確認された。ただし、未来展望の長さとは各変数との関連性は、比較的弱いものに留まり、相関係数が有意に至ったのは、外的統制と顕在不安のみであった。一方、時間的態度では、促進・抑制不安、独断主義、堅さ以外に関してすべて有意であった。

この他に検討されているパーソナリティ要因を挙げれば、達成動機、満足の遅延などがある。一般に、達成動機と時間的展望の間にはポジティブな関連性が見いだされており、達成動機の高いものはポジティブな時間的態度や、長い未来展望の長さを示すという結果が得られている (Knapp & Garbutt 1958; Meade, 1972)。また、満足の遅延、すなわち、より高次の目的のために目の前の欲求充足を延期する能力と時間的展望の関係もまた、ポジティブな関連を持つと考えられている。例えば、幼児から小学生までを被験者とした Mischel & Metzner (1962) によれば、満足の遅延のでき

る個人はできない個人に比して、より未来展望の長さが長いものであった。

人格・認知構造における時間的展望 一方、人格構造や認知構造に関する理論において、個人の時間的展望をそれを構成するものとしてとらえる立場がいくつか存在する。

Rokeach (1968) は、個人の認知の根本であるビリーフ・システム (belief system) の構造を「ビリーフー反ビリーフ」、「中心領域一周辺領域」、そして、「時間的展望」という3つの次元に広がるものとしてとらえ、これら3次元にさまざまなビリーフが位置づけられると考えている。これによれば、例えば時間的展望の狭い人は「過去の栄光」ばかりにとらわれて、現在や未来の自己の状況にかかわるビリーフを持たない。一方、時間的展望の広い人は、過去や現在の実績から未来の状況を予測し、実現可能な目標に関するビリーフを持っていると考えられる (西田, 1992)。

また、Janet (1929) の古典的な研究においては、人格を物質的、社会的、時間的という3つの観点から、語る事ができるとして、それぞれの人格の側面を、身体的人格、社会的人格、そして時間的人格として説明している。その考えに基づいて、守谷 (1994) は、生物的、社会的、時間的という3次元にそって自我が発達していくという自我発達モデルを提唱している。

これらの理論からは、個人の時間的展望が個人の認知構造やパーソナリティ構造において中核的な位置を占めることが示唆される。

(3) 自己意識

近年、時間的展望の個人的特性に属する関連要因として「自己」に対する意識を扱った研究が増加している。そうした研究の対象は、大きく2つに分かれている。1つは、行動や感情を制御する内的枠組みとして自己をとらえる立場からの研究である。こうした研究は自己概念 (self-concept) やセルフ・スキーマ (self-schema) といった自己に対する認知を対象とし、それらの内容や構造と時間的展望の関連が研究のテーマとする。もう1

つは青年期の自己意識のあり方の特徴である自我同一性 (ego identity) を対象とするものであり、この立場からは、自我同一性の達成と時間的展望の様相の関連が検討されている。

自己認知 自己像 (self-image) は、自己概念のうちで、個人にとってより客体化された側面であり、自己概念のあり方を客観的に測定するための有効な指標であると考えられることができるが、この自己像と時間的展望の関連を検討したものとして、自己ラベリングを検討した Tohyama & Nakajima (1989) やセルフ・ディファレンシャル尺度 (長島・藤原・原野・斎藤・堀, 1966, 1967) を自己像の指標とした根本 (1990), 都筑 (1984) がある。

まず、Tohyama & Nakajima (1989) は、20歳から26歳までの165人の男性鑑別所収容者に対して、質問紙を用いて自己ラベリング得点と時間的展望得点の関連性を検討し、両者の間にネガティブな関連を見いだした。そして、収容者が自身をネガティブに考えることが彼の未来の時間的展望を乏しいものとしていると考察している。また、根本・中沢 (1990) は、時間次元に対する不安を意味する時間不安 (time anxiety) を検討し、セルフ・ディファレンシャル尺度) における強靱性、過敏性因子と時間不安との関連を確認している。都筑 (1984) は、同じく、セルフ・ディファレンシャル尺度とサークルテスト、そして、PIL テストで測定した生きがい感の関連を、女子短期大学生を対象に検討した。その結果、3変数には、有意な関連が存在し、ポジティブな自己像を持つことと、未来志向性、および高い生きがい感の関連性、そして、ネガティブな自己像と過去志向性、低い生きがい感の関連が確認され、自己像と時間的展望の関連の深さが示唆された。

その他に、個人の統制感 (perceived control) と時間的展望の各側面とのポジティブな関連が確認されている。たとえば、Platt & Eisenman (1968) や、Thayer, Gorman, Wessman, Schmeidler & Mannucci (1975) は、Locus of Cont-

rol 尺度における内的統制の個人が外的統制の個人に比して、未来展望の長さ、密度という側面において、よりポジティブな傾向を示すとしている。杉山（1994b）は、先行研究に基づき自作した時間的展望項目を用いて、一般的統制感の個人差との関連性を284名の中学生を対象に検討した。時間的展望質問紙の因子分析により、3つの因子が得られ、それらは「過去・現在・未来に対する不満足」、「未来志向性」、「過去志向性」と命名された。そして、それらの下位尺度得点に関して一般統制感の高・低群間の比較を行った結果、それぞれの得点の平均値や、過去・現在・未来に対する不満足の因子と過去志向性・未来志向性との関連性に関して両群間に差異が認められ、一般的統制感と時間的展望における時間的態度および時間的志向性との関連性が確認された。これらの結果も、自己に対する期待や信頼感が時間的展望と深く関連するというを示したものであり、自己概念と時間的展望との関わりとしてとらえ直すことができる。

また、近年、研究が活発に行われているセルフ・スキーマの分野において、Pyszczynski, Holt, & Greenberg (1987) は、後述のように抑うつとイベントの関連、すなわち抑うつ傾向の強い個人は未来の出来事を悲観的な見方でとらえるという傾向を確認しているが、工藤・沼崎・北村(1994b)は、この現象の原因として、セルフ・スキーマと気分の要因を想定している。その結果、情報の処理に利用されるセルフ・スキーマが抑うつ傾向により異なり、それが未来イベントの悲観的な認知と関連することを示唆している。

自我同一性 一方、精神分析学の流れを継承する Erikson (1959) は、生涯を通しての自我発達過程のモデルを提示しているが、そのなかで、青年期を「自我同一性 対 同一性拡散」の危機の時期とし、同一性の形成を青年期の発達課題としてとらえている。この自我同一性の感覚の一つの側面は、現在が過去に根ざし、過去の上に現在の自分が確実に築き上げられているというような意

識と確信であり、このような確信の上に立って個人の未来というものがはっきりと具体性を持って現実的なものとなると示唆している。このような指摘からは、時間的展望の確立という現象が青年期の自我同一性形成の一側面としてとらえられる。なぜならば、自我同一性の達成は、過去・現在・未来の時間的な流れの中での自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つものであるからである（都筑, 1993）。

こうした Erikson の観点に基づいて、自我同一性と時間的展望の関連を検討した研究がある。まず、Baldo, Harris & Crandall (1975) は、青年期の自我同一性が未来志向性と関連すると推測し、133人の青年に対し、心理社会発達尺度 (Psychological Developmental Scale; Wessman & Ricks, 1966) による心理社会的発達度得点と Cottle の時間的展望の各測度 (ラインテスト, 体験的時間的志向性尺度, サークルテスト) を実施した。その結果、自我同一性までの5つの段階は、サークルテストによる時間的関連性との間には正の関連が見られたが、他の尺度においては一致した結果がみられなかった。

一方、Rappaport, Enrich, & Wilson (1985) は、Marcia (1975) による標準化された自我同一性地位判別面接によって4つの類型に分類された81人の大学生の時間的展望を測定した。時間的展望は、Rappaport によるラインテスト (Rappaport Time Line) で測定され、報告された出来事の時期を、遠い過去、近い過去、現在、近い未来、遠い未来に区分して集計された。その結果、自我同一性の地位が上位の地位 (モラトリアム地位と同一性達成地位) は、下位の地位 (同一性拡散地位と早期完了地位) に比して、より各時間区分への出来事の配置に関して、バランスのとれた時間的志向性を示していた。この結果から、早期完了地位は高すぎる未来志向と、同一性拡散地位は高すぎる過去志向と関連し、自我同一性の達成は、バランスのとれた未来志向と関連するとした。

都筑 (1993) は、大学生285人に対し、時間的

関連性と時間的態度と自我同一性地位の関連性について検討した。時間的関連性の測定には、Cottle (1967) のサークル・テスト、時間的態度の測定には、SD 法による時間イメージ尺度が作成されて実施された。4つの自我同一性地位を比較した結果、時間的展望のあり方に差異があることが明らかになった。まず、時間的関連性に関して、高い地位である同一性達成地位とモラトリアム地位の個人は、時間的関連性が高く、未来優位展開(未来志向的)であった。一方、時間的態度に関しては、同一性拡散地位の個人は、自分の過去・現在・未来のすべてにおいて最もネガティブにとらえており、早期完了地位は最もポジティブであった。同一性達成地位、モラトリアム地位は、その中間であった。以上のことから、都筑は、同一性達成地位の個人は未来に対して、最も現実的で計画的な態度を持っていると結論している。

一方、都筑の検討した時間的関連性と自我同一性の関連性を、杉山(1994a)は過去・現在・未来の自己像間の関連性という観点から検討した。過去・現在・未来(未来の自己には理想としての理想自己と予想としての予想自己とを設定)における自己像間の関連性が自我同一性のレベルによって異なると推測し、同一性混乱尺度(砂田, 1979)とセルフ・ディファレンシャル尺度を大学生205人に対して実施し、パス解析を行うことによって検討した。その結果、過去自己の現在自己への影響力は、同一性レベルの高群の方が低群よりも大きく、過去自己と現在自己が予想自己に及ぼす影響力もまた、同一性レベル高群の方が低群よりも大きいことが確認された。この結果は、自我同一性レベルの高い者は、低い者に比して、過去の自己と現在の自己、および現在の自己と予想の自己(個人が「こうなっているであろう」と未来に予想する自己像)の関連性(連続性)を高く認知していることを示唆する。

また、自我同一性達成の過程においては、新たな自己の方向づけのために、過去の自己を改めて意味づけることもまた必要である。そこで植之原

(1993)は、自我同一性の達成過程において自身の過去の経験の意味づけや解釈がどのような意味を持つのかを検討した。44人の大学生を対象に、面接によって「大学」「専攻」「将来」「尊敬」「影響を受けた人」という6項目の命題(現在、自己に関連する問題に関する明確な見解)について尋ね、さらにその一週間後にそれぞれの項目に関して、それぞれの命題の「きっかけ」まで思い出すように求めた。そして、その面接中の発言を元に、過去の経験の記憶の「特定性(過去の記憶が特定化される程度)」「精緻性(過去の記憶の詳しさ)」「自我関与(過去の出来事をめぐる自己の考え・感情への言及の程度)」「命題性(自己に関わる問題への認識の明瞭さ)」「関連性(自己に関する問題と過去の記憶の関連の程度)」という5つのカテゴリについて評定した。同一性地位面接(価値観領域)によって判別した地位に関して、各カテゴリの得点を比較した結果、「関連性」のカテゴリのみにおいて同一性達成地位の方が非達成の地位(早期完了地位)よりも得点が有意に高く、過去の経験の記憶を現在の命題と深く関連づけて使用することが明らかになった。この結果からは、自我同一性が確立されていく際に、関連する過去の経験が繰り返し参照され、現在の命題との関連を深め、その解決に使用される段階があることが推測される。

時間的展望と適応

Israeli (1932) や Frank (1935), Lewin(1942) といった初期の研究にも見られるように、時間的展望は歴史的にみても、現在の感情や行動と深い関連を持つものとして考慮されてきた。本節では、時間的展望の関連要因のうち、現在の適応に関する研究を概観することによって、その関わりの様相を検討する。

(1) 心理的適応

人間の現在の行動・感情における心理学的未来の重要性を初めて理論的に明確にしたのは、Lewin (1944) であったが、そこでは、希望や期待、恐

怖といった概念と心理学的未来との関わりが以下のように検討されている。「恐怖 (fear) は嫌悪と同一の次元を持つように思われる。しかし、大抵の場合、恐怖は心理学的未来に関係づけられている。それは「時間的展望」のある部分を扱わねばならないのであって、この点で希望、プラン、期待のごとき概念に類似している。期待 (expectation) は、心理学的未来の実在水準における心理学的構造、及び力の分布に関係する。希望 (hope) は、実在水準の構造と心理学的未来の願望水準の構造との間の関連に関係する。罪業 (guilt) は、実在水準の構造と心理学的過去の願望水準との間の関係に関連する (末永, 1977 の訳による)」としており、現在の生活における様々な不安や抑うつという感情は、その個人の心理学的未来と関わることを示唆される。

不安・抑うつ傾向 まず、不安と時間的展望の関連について、Lipman (1958) は、MASにより、顕在性不安を測定し、それに基づく高不安者を対象とした研究の結果、個人の不安は彼の心に抱かれている未来展望の明瞭さ、未来に対する希望の程度、未来に予想される恐怖といったものによって影響されることを見いだしている。一方、Cottle (1969) は、自身が開発した投影的手法であるサークルテストによって時間的関連性 (time relatedness; 過去と現在、現在と未来という時間次元の関連性の認知を指す。時間的能力 time competence と呼ばれることもある) の研究を進めているが、それによれば、顕在性不安と時間的関連性の間には、負の関連性が確認された。Robertson (1978) は、大学生、大学院生を対象として、時間的展望の各指標と各種の個人変数との関連を検討したが、これにおいても、顕在性不安は、時間的能力スケールの時間的能力因子、および SD 法によって測定された時間的態度との間に負の関連を示した。Knappu (1965) のアイゼンク・パーソナリティ目録 (Eysenk Personality Inventory) を用いた調査によれば、時間的能力に関して、高神経質傾向を持つ個人は、

低神経質傾向を持つ個人に比して、時間的能力において劣るという結果が得られている。

一方、抑うつ傾向との関連に関して、認知療法の中心的存在である Beck (1976) は、自己・世界・未来に対する認知を認知の 3 要素と呼び、これらに対する認知の歪み、すなわち、これらの要素について統制できないと感じたときに、抑うつが生じるとしている。また、抑うつ患者が完全な敗北と考えて、目標を諦めると失感情状態に陥ると推測している。林 (1994) は、こうした推測を検討するために、Beck による BDI (Beck Depression Inventory) と白井 (1991) の時間的展望尺度 (ここでは「より遠くの将来や過去の事象が現在の行動に影響を及ぼすという時間的展望の extension が拡大、および将来に希望を持ち現在の生活に充実を感じ、過去を受容する感覚」を測定する尺度) との関連を検討し、 $r = -.536$ の有意な相関関係を確認し、Beck の推測が成立したと結論している。なお、La Roche ら (1986) も、BDI、健康問題チェックリスト、顕在不安尺度などを実施し、時間的展望との有意な関連性を確認している。この点に関して、入院中の精神病患者について検討した Escalona (1940) は、普通の人々が実現可能である時間的展望によって行動が導かれているのに対して、うつ病患者においては、心理的現在によってすべてが決定されると述べている (Wallace & Rabin, 1960)。

近年の研究においては、抑うつとライフイベントの関連を検討した Pyszczynski, Holt, & Greenberg (1987) が、自己と他者に感情価を持った出来事が生起する確率を予測させ、抑うつ傾向の強い個人が未来を悲観的な見方でとらえることを示している。また、工藤・沼崎・北村 (1994a) は、彼らの追試を行い、同様の結果を得、さらにそうした抑うつ的な個人と非・抑うつ的な個人の差異は、一般的な出来事よりも個人的な出来事の生起予測をさせたときの方が顕著であることを見いだした。

適応的要因 このように、不安や抑うつという

不適応な感情・情緒と時間的展望の各側面との関連は多くの研究によって認められている。一方、近年、「精神的健康」ないし「well-being」という概念は、不適応でないことに留まらず、個人の積極性などの側面も含めた、より建設的な概念としてとらえられる傾向にある。こうした適応的な側面と時間的展望はどのような関連にあるのか。

先述のように、Lewin (1942) は、個人や集団のモラル (morale) が個人の時間的展望に依存するとし、進んで払おうとする努力や苦痛は、それによって目標に到達しようという望みによって支えられていると述べている。また、個人が目標に達し得ると感じる場合には、行動が未来志向的になり、目標が到達不可能であると感じる場合には、現在志向的になる (Lewin, 1948) と指摘している。

未来展望と生活感情の関連を検討した小宮山 (1973; 1975) は、自分の未来の明暗 (「自分の未来」をどうみているかを4件法で尋ねた) と高校生・大学生の様々な生活感情、特に、「生きがい」「希望」「自信」「無力感 (逆方向の関連)」「幸福感」との間に高い関連性を確認している。また、南・光富 (1990) は、未来展望の明るさと生活感情の一つである「有能感」とのポジティブな関連を示している。

さらに、時間的展望と学業成績との関係について、Teahan (1958) は、6・7・8学年の少年を対象に、学業成績と時間的展望の長さとの関連を、楽観主義の尺度、TAT、物語構成法および体験目録法 (Eson の方法) を用いて検討した。その結果、学業成績の良い個人は、悪い個人に比して、有意に楽観主義であり、未来に対する多くの言及と広い時間的展望を示した。17歳から19歳の被験者を用いた O' Rand & Ellis (1974) でも、学業成績の下位、中位、上位の順に未来展望の長さが長くなることが確認され、さらに大学生を被験者とした Epley & Ricks (1963) でも、個人の学業成績と未来展望の広さには、有意な関連があることが示されている。こうした未来展望と学業成績

のポジティブな関連に関して、小宮山 (1973) は、未来展望の長い個人と短い個人の「学業への努力」のとらえ方の違いを反映していると推測している。すなわち、学業に対する継続的な努力は、未来展望を持たない個人にとっては退屈なつまらないものであるが、長い未来展望を持っている個人にとっては、これらは最終的目標である職業上の成功を得るための下位目標となっているということである。この点に関して、De Volder, & Lens (1982) は、251人の男子高校生の一般的な動機づけ的目標の誘意性と道具性を調査した結果、高い勉強持続意志を持つ被験者は、その低い被験者に比して、遠い未来に位置する目標に有意に高い誘意性を与え、それに到達するためのより道具的なものとして、現在の勉強をとらえているということを見いだしており、上述の考察と一致する。

(2) 非行性

時間的展望と社会的適応の関連において、比較的早期から注目されてきたのは、非行少年の時間的展望というテーマである。

まず、未来展望の長さの側面に関して、Barndt & Johnson (1955) は、自由に物語を作らせる物語完成法によってそれを測定し、少年院に収容されている26名の男子非行少年と対照群 (無非行少年) を比較した。そして、報告された物語の中に包含された時間の長さによって得点化した結果、非行少年の構成した物語の時間の幅 (span) が対照群に比して有意に短いことが示された。また、この Barndt らの研究が男子のみに限られていたのに対し、Davids, Kidder & Reich (1962) は男子のみではなく女子をも加えて同様の手法による追試を行った。その結果、Barndt & Johnson (1955) と同様の結果が確認された。すなわち、性別に関係なく、非行者は、対照群よりも物語に示された時間の幅が現在に限定的であった。同様の結果は、Brock & Giudice (1963), Stein, Sarbin & Kulik (1968) によっても得られている。

本邦においては、山本・松本・小宮山・渥美・

新田・台（1968）が、文章完成法のなかの未来展望と関係する3項目（「将来のこと」「将来に対して」「私はこの先」）を用いた分析を行っている。被験者は、少年院入所中の生徒30名と対照群の同年齢の定時制高校生30名であった。その結果、非行少年の将来の見通しは、極めて短いごく身近のことにしか及ばないことを確認している。

次に、過去や現在、未来に対する時間的態度の側面に関しては、未来の長さのように研究が蓄積されてはいないが、Laudau（1976）の研究によれば以下の傾向が確認されている（日高・吉田，1970）。非行群は過去を否定的に、未来を肯定的に知覚し、収容された者では、現在を否定的に知覚する。それに対し、非・非行群では、過去・現在・未来に対する感情的態度は、よりバランスを保ち、しかも現実的であったという。

本邦においては、小宮山・星・高橋・川田（1976）は、家庭裁判所で保護観察の処分が下された高校生と有職青年および対照群の非行歴のない高校生と有職青年に対して質問紙調査を行っている。高校生については非行群に「卒業後の予定の不明確さ」「未来の希望のなさ」等、ネガティブな時間的展望が多くみられたが、一方、「未来の展望の明るさ」においては正常少年よりもポジティブな時間的展望がみられた。有職少年では、非行群と正常少年の群との間に有意差の認められたものは「未来の幸福感」「将来の生活目標」「未来展望の明るさ」「未来の楽観性」等であり、前三者は正常少年の特徴で、その他は非行少年の特徴であった。このように高校生群、有職少年群を問わず非行少年は将来の具体的な展望においては暗いにも関わらず、全体的には明るくみるというアンビバレントな傾向が確認された。勝俣・篠原・村上（1982）が少年鑑別所に収容された非行少年群と非行歴のない男子高校生からなる対照群に対して質問紙調査を実施した結果においても、非行少年はこのアンビバレントな時間的展望を示した。すなわち、非行少年は、過去・現在・未来の時間的次元に対して不快感や不安を抱いているにも関わ

らず、未来に対して楽観的でもあった。

一方、時間的志向性に関しては、先述のようにこの概念が未来展望の長さや未来に対する態度と混同され、そうした長さや態度を時間的志向性と称した研究がほとんどであるため、本稿の枠組みと一致する観点から検討した研究は多くないが、勝俣・篠原・村上（1982）の質問紙調査においては、「将来の目標を持って生活している」「将来のために今できるだけ努力している」などの項目からなり、本稿の立場と比較的近い「未来志向性」の因子が抽出されている。この下位尺度得点に関しては、非行少年の方が対照群よりも未来志向的であるという傾向を示した。

また、勝俣の TPT（時間的展望テスト Time Perspective Test）は未来展望の内容を検討するものであるため、非行少年の未来に対する志向性の内容を検討することができる。そこで、TPT を用いて教護院に入所中の中学生8名と普通中学校22名とを比較した上田・白鳥・大吉・園部・勝俣（1980）をみると、未来に関する反応において、非行少年では、帰省、退園、就職、遊びなどの解放されることへの期待や願望が強く、対照群の挙げているようなテストや進学のような未来に対する努力を必要とする課題はほとんど認められなかった。

（3）時間的展望の行動調整効果

Frank（1939）や、Lewin（1942）の古典的な研究以降、心理学的な未来は、現在の行動を方向づける機能を持ち、それゆえ、現在の適応と関連すると考えられてきた。そして、これまで概観してきたように、これまでの時間的展望研究においては、現在の抑うつや不安、さらには非行という種々の不適応との関連性が認められている。一般に、不適応状態にある個人は未来展望が非常に限定されたものであるという傾向がみられた。それでは、個人の適応—不適応という側面は、こうした未来展望の様相と関わる、具体的に言えば、ポジティブな未来展望は現在の適応に寄与すると考えることができるのであろうか。

この論点を結論づけるためには、さらに、心理療法の立場から示唆されている未来展望の負の影響性について検討する必要がある。心理療法のいくつかの立場、例えば、ゲシュタルト療法の創始者である Perles や、Shostrom (1968) は、神経症のクライアントが（過去志向や現在志向のみではなく）病的に未来志向的である場合があることを述べており、(ポジティブな) 未来展望の指標と適応とが一致しない例を示しているのである。実際、心理療法におけるいくつかの立場は、長い未来展望や未来志向性の負の影響性を強調し、時間的展望など全く持たないで現在を完全に生きることがずっと効果的だと主張し、個人のなかで過去や未来が何らかの役割を成している人々（時間的展望を持った個人）を自身の潜在的能力を実現（自己実現）できないとしてとらえている。こうした個人にとっては、未来への展望は、現在についての行動を調整するものとは考えにくい。むしろ、彼らにとっての未来展望は、現在の苦境からの逃避としての意味を持つ「幻想」として解釈されるべきであろう。このように未来展望はその個人の適応に対して、行動を制御したり、モラルを喚起するだけではなく、場合によっては、現在からの逃避という性質を持ち、現在に対して影響力を持たない、あるいは逆に、負の影響を持つこともあると考えられる(杉山, 1994b)。

この点に関して、白井(私信)は、不適応状態にある個人も未来に対する希望を持っているが、その構造が問題なのであり、それらの「現実性のレベル」や「構造」に問題がある、という可能性を指摘し、「一般的な個人と異なり、彼らにとっては、未来展望が現在の動機づけを誘発するような性質を持たないのではないかと推測している。先述の非行少年が未来志向的な展望を示したという勝俣・篠原・村上(1982)の結果もこの逃避という機制ゆえに現在への影響を持たなかったと考慮すれば理解できる。

このように、時間的展望と適応との間の関連性に関しては、時間的展望の有無や長さ、希望の有

無によってのみ一義的に結論づけることは難しい。それゆえ、その時間的展望の現在の行動や感情への影響力という、現在に対する行動調整効果という観点に基づき、影響力の「強さ」や「方向」というパラメータを視野にいたした上で、そのメカニズムを検討していく必要があるものと考えられる。

時間的展望研究の問題点と課題

ここまで、時間的展望の諸研究の概観を行ってきた。これらの研究の問題点や課題に関して、以下に未来展望と現在との関わりに関する問題点と課題に関して議論する。

第1の問題点として、時間的展望の現在の感情・行動への影響性という観点に関して、これまでの研究ではそのメカニズムを扱っていないということも挙げることができる。例えば、Lens (1987) は、「他のパーソナリティ特徴とどのように関連しているのか」という関心に比して、未来展望の行動的影響ということには、あまり関心がもたれてこなかった。そして、未来展望の概念は操作的定義の多くにおいて、そのもともとの意味の核心を失い、ほとんどがその「状態」の研究であり、行動に影響する動機づけの変数としては研究されていない」という現状を指摘している。

このように、時間的展望という概念は、適応状態や行動を説明する変数として概念化されたにも関わらず、その関心は発達的な変化や他の変数との相関関係にのみ向けられ、現在の行動や適応に「どのように」影響を与えるのかという側面はネグレクトされてきた。そのため、現在までの研究では、時間的展望が現在の行動や適応に影響を及ぼすメカニズムを十分に説明しているとは言えない。すでに概観したように時間的展望は適応一不適応に関わる多くの変数に関わることを確認されているが、その影響メカニズムが明確にされない以上、時間的展望研究の側からそれへの心理的援助に対する有効な示唆を与えることも困難であるといえる。

こうした点について Lessing (1972) は、個人

の未来展望をとらえる場合に、純粹に認知的な未来展望である「認知的未来展望(cognitive future time perspective)」と、実際に行動を動機づける未来展望である「認知—動機づけ的未来展望(cognitive-motivational future time perspective)」を区別する必要性を指摘している。彼女によれば、投影法による認知的な側面と認知—動機づけ的な側面は、人生満足度との関連性において異なる様相を示すとされる。

これらのことを考慮すると、今後の時間的展望研究には、単に変数間の相関関係のみを議論するだけではなく、人間行動の説明概念としての理論展開を図り、その上での実証研究を重ねていくために、現在に影響を持つ未来展望の先行要因や機能、そして内容・構造を検討していくことが急務であると考えられる。

第2の問題点は、時間的展望の先行要因や現在の適応との関連をとらえる際に、これまでの研究では1つの側面、特に未来展望の長さという1つの側面からのみとらえられてきたという点である。時間的展望の複数の側面を検討している場合でも、それぞれが独立して扱われており、それらの側面の相互作用に関して検討されていない。

しかし近年、時間的展望の機能を、その複数の成分の相互作用に基づくとする指摘がある。まず、Van Calster, Lens & Nuttin (1987)は、未来展望の変数を Vroom (1964)の動機づけに関する「EIV (expectancy-instrumentality-value)モデル」の枠組みでとらえ、勉強の個人的未来の成功に対する道具性と個人的未来に対する時間的態度の相互作用が、現在の勉強のモチベーションと関連を持つことを確認しており、このような自己の活動の道具性認知を未来展望の認知的側面の1つとして考えれば、これは未来展望の認知的側面と価値的側面の相互作用を検討していることになる。また、南・光富(1990)は、未来展望が複数の成分から構成され、機能するシステムの構造を成すとしている。

上述のように、時間的展望を行動調整効果とい

う観点からとらえる場合に、この枠組みの示唆するものは大きく、これらの観点からすれば、現在の行動に影響を与え得るような未来展望の機能は、未来展望の単独の側面にのみ関わるのではなく、未来展望に関するいくつかの側面による「システム」的な相互作用に基づくことが推測される(e.g., 杉山, 1995a)。それゆえ、今後、こうした現在への影響力を持つ時間的展望を考慮する場合には、その時間的展望の各側面を1つ1つ別々に検討するだけではなく、1つのシステムとしてとらえる観点に基づき、複数の側面の関連性を視野に入れる必要があるといえよう。

謝 辞

本稿の作成にあたりご指導頂いた立教大学文学部 水口禮治教授に深く感謝いたします。

参考文献

- 小宮山要 1973 青年の時間的展望に関する研究
青年心理学研究会(編)「わが国における青年心理学の発展」金子書房
- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven Universiti Press/LEA.
- 白井利明 1994 時間的展望の生涯発達に関する研究の到達点と課題 大阪教育大学紀要, 第4部門, 42, 2, 187-216.
- 都筑学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30, 73-86.

引用文献

- Baldo, R., Harris, M., & Crandall, J. 1975 Relations among psychological development, locus of control, and time orientation. *Journal of Genetic Psychology*, 126, 297-303.
- Barndt, R. J., & Johnson, D.M. 1955 Time orientation in delinquents. *Journal of Ab-*

- normal and Social Psychology*, **51**, 343-345.
- Brock, T., & Giudice, C.D. 1963 Stealing and temporal orientation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **66**, 91-94.
- Cottle, T.J. 1967 The circle test: an investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, **31**, 58-71.
- Cottle, T.J., & Pleck, J.H. 1969 Linear estimations of temporal extension: the effect of age, sex, and social class. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, **33**, 81-93.
- Epley, D., & Ricks, D.R. 1963 Foresight and hindsight in the TAT. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, **27**, 51-59.
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the Life cycle*. International University Press. (小此木啓吾訳編 1973 「自我同一性」 誠信書房).
- Frank, L.K. 1939 Time perspective. *Journal of Social Philosophy*, **4**, 293-312.
- 林潔 1994 Depression 水準の測定および Depression と時間的展望との関連の検討 白梅学園短期大学紀要, **31**, 153-161.
- 日高三喜夫・吉田昭久 1980 Time Perspective 研究の概観 茨城大学 教心・異教・職指学科教育心理と近接領域, **5**, 83-94.
- Kastenbaum, R. 1961 The dimensions of future time perspective, an experimental analysis. *Journal of General Psychology*, **65**, 203-218.
- Kendall, M.B., & Silbey, R.F. 1970 Social class differences in the time orientation: artifact? *Journal of Social Psychology*, **82**, 187-191.
- 勝俣暎史・篠原弘章・村上みどり 1982 非行少年の時間的展望 熊本大学教育学部紀要, **31**, 267-277.
- Klineberg, S.T. 1967 Changes in outlook on the future between childhood and adolescence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **7**, 185-193.
- Knapp, R.H. 1965 Relationship of a measure of self-actualization to neuroticism and extraversion. *Journal of Consulting Psychology*, **29**, 168-172.
- Knapp, R.H., & Garbutt, J.T. 1958 Time imagery and the achievement motive. *Journal of Psychology*, **26**, 426-434.
- 小宮山要 1973 青年の時間的展望に関する研究 青年心理学研究会(編) 「わが国における青年心理学の発展」 金子書房.
- 小宮山要 1989 青年の時間的展望に関する研究 1 一未来の時間的展望の明暗と時間次元に対する態度の比較一 桜美林短期大学「紀要」, **25**, 105-126.
- 小宮山要・星悦子・高橋和雄・川田三夫 1976 非行少年の生活意識に関する研究 科学警察研究所報告, 防犯少年編, **17**, 83-93.
- Lamm, H., Schmidt, R.W., & Trommsdorff, G. 1976 Sex and social class as determinants of future orientation (time perspective) in adolescents. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 317-326.
- Laudau, S.F. 1976 Delinquency, institutionalization, and time orientation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 745-759.
- LeShan, L.L. 1952 Time orientation and social class. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 589-592.
- Lens, W. 1986 Future time perspective: A cognitive-motivational concept. In Brown, D.R., & Veroff, J. (Eds.) *Frontiers of motivational psychology*. Berlin: Springer-Verlag, 173-190.

- Lens, W., & Gailly, A. 1980 Extension of future time perspective, age, and life satisfaction of children and adolescence. *International Journal of Behavioral Development*, **3**, 1-17.
- Lessing, E.E. 1968 Demographic, developmental, and personality correlates of length of future time perspective (FTP). *Journal of Personality*, **38**, 183-201.
- Lessing, E.E. 1972 Extension of personal future time perspective, age, and life satisfaction of children and adolescents. *Developmental Psychology*, **6**, 457-468.
- Lewin, K. 1942 *Time perspective and morale*. New York: Houghton Mifflin. (末永俊郎訳 1954 時間的展望とモラル「社会的葛藤の解決」東京創元社)。
- Lewin, K. 1948 *Resolving social conflicts*. New York: Harper. Lewin, K. 1951 Field theory and social science. New York: Harper. (猪股佐登留訳「社会科学における場の理論」誠信書房)。
- 植之原薫 1993 同一性地位達成過程における「事象の記憶」の働き 発達心理学研究, **4**, 154-161.
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Meade, R.D. 1972 Future time perspectives of college students in America and in India. *Journal of Social Psychology*, **83**, 175-182.
- Mischel, W., & Metzner, R. 1962 Preference for delayed reward as a function of age, intelligence, and length of delayed interval. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **64**, 425-431.
- 南博文・光富隆 1990 青年期における未来展望と有能感の関係に関する研究 広島大学教育学部紀要, **38**, 241-247.
- 守谷國光 1994 老年期の自我発達心理学的研究 風間書房.
- 根本橋夫・中沢千鶴加 1990 時間不安と自我同一性, 達成動機, および自己像との関係 千葉大学教育学部研究紀要, **38**, 47-54.
- 西田公昭 1992 「信念」に従う 松井豊(編) 「対人心理学の最前線」サイエンス社.
- 沼崎誠・工藤恵理子・北村英哉 1994a 抑鬱傾向が将来の出来事の予測に及ぼす影響 (1) 一個人的出来事・一般的出来事— 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 426-427
- 沼崎誠・工藤恵理子・北村英哉 1994b 抑鬱傾向が将来の出来事の予測に及ぼす影響 (2) ムード状態・自己と他者— 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 428-429
- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press/LEA.
- O'Rand, A., & Ellis, R.A. 1974 Social class and social time perspective. *Social Forces*, **53**, 53-63.
- Platt, J.J., & Eisenman, R. 1968 Internal-external control of reinforcement, time perspective, adjustment, and anxiety. *Journal of Genetic Psychology*, **79**, 121-128.
- Platt, J.J., Eisenman, R., Delisser, O., & Darbes, A. 1971 Temporal perspectives as a personality dimension in college students: A re-evaluation. *Perceptual and Motor Skills*, **33**, 103-109.
- Rappaport, H., Enrich, K., & Wilson, A. 1985 Relation between ego identity and temporal perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 1609-1620.
- Ricks, D., Umbarger, C., & Mark, R. 1964 A measure of increased temporal perspective in successfully treated adolescent delinquent

- boys. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **69**, 685-689.
- Robertson, S.A. 1978 Some personality correlates of time competence, temporal extension and temporal evaluation. *Perceptual and Motor Skills*, **46**, 743-750.
- Rokeach, M. 1968 *Beliefs, attitudes, and values*. Jossy-Bass.
- 白井利明 1985 児童期から青年期にかけての未来展望の発達 大阪教育大学紀要(第IV部門), **34**, 61-70.
- 白井利明 1991 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連 心理学研究, **62**, 260-263.
- 白井利明 1994 時間的展望の生涯発達に関する研究の到達点と課題 大阪教育大学紀要, 第4部門, **42, 2**, 187-216.
- Shostrom, E.L. 1968 Time as an integrating factor. C. Buehler & F. Massarik (Eds.) *The course of human life*. New York : Springer Publishing Company, 351-359.
- 杉山成 1994a 時間次元における諸自己像の関連性と自我同一性レベル 教育心理学研究, **42**, 209-215.
- 杉山成 1994b 中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性 教育心理学研究, **42**, 415-420.
- 杉山成 1995a 青年期における未来展望と適応一期待理論によるアプローチ— 立教大学心理学研究年報, **37**, 65-75.
- 杉山成 1995b 時間次元における諸自己像の関連からみた時間的展望 心理学研究, **66**, 283-288.
- Teahan, J.E. 1958 Future time perspective, optimism, and academic achievement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **57**, 379-380.
- Thayer, S., Gorman, B.S., Wessman, A.E., Schmeidler, G., & Mannucci, E.G. 1975 The relationship between locus of control and temporal experience. *Journal of Genetic Psychology*, **126**, 275-279.
- Tohyama, N., & Nakajima, F. 1989 Self-labeling and time perspective in young inmates. *Tohoku Psychological Folia*, **48**, 33-41.
- 都筑学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, **30**, 73-86.
- 都筑学 1984 青年の時間的展望の研究 大垣女子短期大学研究紀要, **19**, 57-64.
- 都筑学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40-48.
- 上田一博・白鳥哲・大吉行秀・園部博範・勝俣瑛史 1980 非行少年の理解のための時間的展望テスト(TPT)の適用(その2) 厚生省児童家庭局(監修)児童相談事例集(日本児童協会), **12**, 137-156(白井, 1994による).
- Van Calster, K.V., Lens, W., & Nuttin, J. 1987 Affective attitude toward the personal future: Impact on motivation in high school boys. *American Journal of Psychology*, **100**, 1-13.
- Vroom, V.H. 1964 *Work and Motivation*. John Wiley and Sons. (坂下昭宣他訳 1982 「仕事とモチベーション」白桃書房)
- Wallace, M., & Rabin, A. I. 1960 Temporal experience. *Psychological Bulletin*, **57**, 213-236.
- Wessman, A.E. 1973 Personality and the subjective experience of time. *Journal of Personal Assessment*, **37**, 103-114.